



神戸に住む私の弟夫婦の長男の真一君が 39 歳で突然この世を去りました。弟夫婦にとっては長らく待って与えられた大事な息子でしたし、彼の弟妹にとっては頼りがいのある兄でした。

家庭では、誠実で優しい夫であり、4 歳、2 歳の子どもの子煩悩な父親です。子どもが大好きで、小学校教師をしていました。西宮教会では 14 年間、日曜学校教師として奉仕してきた信徒です。

私はその知らせに驚き、受け入れがたく、なぜ？と嘆くしかない思いになりました。

真一君は 8 月 21 日(日)深夜に発熱し(38.6℃)、その日の午後 4 時半に亡くなりました。あまりに突然のことでコロナ以外の可能性を考え、神戸大学医学部付属病院で病理解剖を受けましたが、心臓、肺、脳に全く損傷はなく、死因は「新型コロナウイルス感染症(疑)」と診断されました。医師は「おそらく苦しみの間さえもなく、ほんの一瞬で急死しただろう」と言われたとのこと。こんなことがあるのでしょうか。

主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。(ヨブ記1:21) との聖書の御言葉が頭のなかでグルグル回りました。主が奪ったのではなく、コロナが奪ったのだ！と怒りのような思いが突き上げてきました。塵にすぎないお前は塵に返る。(創世記3:19) と、人は「死すべき者」と認識していても、寿命まで生きられれば死を受容できますが、まだ若い、これから、という人の死は受け入れがたいものです。その思いをぶっつけるべき相手は命を与えられた神様しかありません。

告別式は真一君が赤ちゃんの時から通っていた西宮教会で31日(水)に行われました。喪主を務める妻 彩さんと幼い二人の子どもたちの喪失感を思い、胸が痛みました。全員悲しみに打ちひしがれていましたが、告別式は愛に溢れ、穏やかで、心に沁みるものでした。慰めに満ちた式辞を頂きました。祭壇の花、讃美歌を真一君の母と妹が彼らしさが現れるように用意していました。式次第の中に真一君が日曜学校で話した「放蕩息子」の説教—私(父なる神)のことを信じていようと、どう考えていようと私にとってお前は大切に愛する存在なんだ(一部)—が挿んであり、真一君の信仰が吐露されていて、真一君がそこにいるような思いになりました。最後に喪主の彩さんが「夫は多くの方々との豊かな交わりに支えられ、喜びの中で自分の道を走りとおしたのだと心より感謝申し上げます」と挨拶した時、思わず、悲しみに言葉に詰まりました。その時、4歳の長男颯君が、ママのほうに向かって、立ちあがり、小声で「頑張って」と言って、投げキッスを何度も一生懸命するのです。健気な姿に、参列者たちは微笑み、ママは勇気をもらいました。

真一君と彩さん夫婦が作ってきた家族の姿がそこに現れたと私は強く感じました。それは「愛しているよ、応援しているよという思いを精一杯表現する」という姿勢です。幼い颯君が知らず知らず、親の姿を見て、身についたものなのだと感じました。誰もが受容しがたいこの別離を、忍耐しつつ、残された者たちが慰め合い、助け合って生きようとする時、神様の祝福を実感し、希望が与えられるのではないかと、幼ない遺児の姿から知らされました。